

原子力・放射線安全リーダーシップに関する IAEA 国際スクールの取り組み

Activities on IAEA International School of Nuclear and Radiological Leadership for Safety

*若杉 圭一郎¹, 明石 眞言²

¹東海大学, ²茨城県竜ヶ崎保健所

次世代リーダーの育成を目的として、日本・アジア諸国の中堅の人材を対象に実施した IAEA 国際スクールの内容について報告する。

キーワード： GSR Part2, 安全文化, リーダーシップ, マネージメント, アクティブラーニング

1. はじめに

2020 年 2 月 17 日から 28 日にかけて、日本・アジア諸国の中堅の人材を対象にした「IAEA 国際スクール 原子力・放射線安全リーダーシップ (IAEA 国際スクール)」を東海大学にて実施した。本スクールには、日本およびアジア諸国から 29 名の参加者があった。以下に、本スクールの概要について説明する。

2. IAEA 国際スクールの特徴

本スクールは、6 日間の研修と 3 日間の施設見学により構成され、GSR-Part2 に示されている要件に基づき、原子力安全のためのリーダーシップとマネージメントに関する能力を開発することを目標とした。研修では、講師から受講者へ一方的に知識を提供するいわゆる授業形式の講義は一切行わず、グループワーク、ゲーム、ケーススタディーなどを多用したダイナミックな教育アプローチが採用された。これは、本研修が GSR-Part2 に関する知識の習得を目指しているのではなく、実体験を通じてリーダーに必要なスキルを身に付け、これらを研修後の日々の業務に活かしてもらうことに主眼を置いているためである。また、参加者の多様性も IAEA 国際スクールの特徴の一つに挙げられる。国、文化、職種、専門、など様々な背景をもつ参加者との協働は、多様な価値観を理解するための実践的な学びの場であり、リーダーシップに欠かせないコミュニケーションスキルやマネージメントスキルの能力開発の場としても適していると考えられる。

3. 研修内容

研修では、参加者は様々な教育プログラムに取り組むが、ここではその一例としてケーススタディーについて説明する。ケーススタディーは、原子力分野の現場で起こり得る競合する要件（例えば、原子力発電所の定期検査でのトラブルによる遅延と安全）が衝突する場面が想定され、場の設定、主な登場人物、事象の前段階から事象発生までのプロセスや環境がシナリオとして具体化されている。スクールでは、ファシリテーターが参加者に質問を投げかけ、登場人物の振る舞いや意思決定プロセスをリーダーシップの観点から複数の切り口で検証し、最後にそれらを踏まえたロールプレイを行う。このようなプログラムを通じて、事故に至る可能性のある複雑な状況や原子力分野の現場で直面しそうな立場や役割を疑似体験し、改善を試みることでより深いレベルでの理解が達成される。スクール終了後の参加者からのフィードバックにおいても、このような参加型の研修による学びの有効性を支持する意見が多くあった。これはこれまでの座学を中心とした“教わる”とともに、アクティブラーニングを活用した“学ぶ”行為の重要性を示唆していると考えられる。

4. まとめ

原子力分野は、他の産業に比較しても社会から極めて厳しい目で見られており、些細な失敗も許されない風潮があるが、本来人間は失敗を通じて様々なことを学ぶ。このような機会をグループワークやケーススタディーなどを活用した教育プログラムを通じて得ることは合理的であり、学習効果も高いと考えられる。2021 年も中堅の人材を対象とした IAEA 国際スクールの開催を予定しており、関係機関からの多くの参加を期待している。

*Keiichiro Wakasugi¹, Makoto Akashi²

¹Tokai Univ., ²Ryugasaki Public Health Center